續猿義經解

八上

陽明文庫

続猿蓑巻七書乃部類

妙楽寺

あらさきたてて老父の省記
すてゝ寄る集たりさるを大鏡
撰釋乃抄かゝよりしを書
くさくて弦及古乃古くし
見を出まゝ子拾抄のむゝ
まけかたゝ見城英さむと
すゝ拾ゝ父ゝゆるゝ出ゝやを
らゝ門人誰かゝ抄ゝ尓ゝ合せ
ひそゝやこの小奇厠氏よ読て
小冊とゝなゝぬ父よゝ古ひすと
いへゝ毋ゝ祖翁乃俳諧と
注よ抄かゝれゝ敢て呵責
乃沙汰ゝ乃小ゝ乃ゝ
本原抄見ゝすきむやと

同盟乃諸子とつちとを
永く流していさゝの風流
乃助けとなるものなり

天本堂公石

酒井家藏

続猿蓑注解

月院社何丸撰釋
六木堂公石　著

八九間空て雨降る柳哉

西華坊云此句ニ為謂あり
去来ハ曰我もさ
坊云昔先あり　木曽塚の旧草にありて或人此句をと
ひて云是ハ親し此柳ハ白雲の去鶴ハ間の松波薄のそり
よりも中枝ことことてさし出るの八九間もそらにひろかりて
春の雨の降るにぬれつきあしむよのされハ義ハ僕の
あらてこうり出すみを見およろしてきりや大佛のあたりをかかる
柳を見置るとや申されし　続猿蓑にまたの篇の島ある
妻とに緑りて春雨の降ふるぬれしきとハ清して定めたる也
去来曰我ハ夏秋の事ならハ別に又おもしてこの
春の柳の句三ツ有りつまえ九中そ見むと有りしを八九間の柳
さる風情ハいつこまの緑りしつしやされハそよ大仏の
あたりなりしすやけふとや翁もそこえとて笑ひ玉へり
淡舟云雨ハ降して二三間ほと上ちりて八九くぬまのあたる去
柳ハ糸の自つるさ流去雨そ出ひて見る庭ハ八九間の上に
ても粉出りと雨て見ゆるとつよく見處よりしさるにや
あしむとハ此説も又出てかく書に記す　以上説叢大全に見ゆ
一書に曰陶淵明か帰田園居詩に曰方宅十餘畝草屋八九
間楡柳蔭後簷桃李羅堂前とかくるすをも並へて見立まし
上するかの大仏の柳にも出ひ合さまきて所明の織偶の吹となり
ぬらむ只八九間はかりの句なり雨の子くし只不俳諧の柳を
雨と見しるるなり

一書に曰、柳に雨しのや、青の色く深て時しく日の陰りあれて
柳の糸に降さゞハ八九分も盛に雨の降ハ姿で何しに鉛く哀
曲の寸くれるにならで或は絲像の其りて桜柳ハ八九分盛く
見るの詩人の常にして八九分中にと盛れりと云こ
一書に云、柳の糸に風になびけるあゝさに八八九分も盛に
盛のみなりとの見ゆなり
一書に云、此句宗匠の説数多あれとも未く用ひらし只其意
の趣なるを示記し置る句之、九ハ老陽の数にして上なる
古きをと九天といひ雨を云き古り陰の柳の降なるを段
八九分といふより陰といふ盛るあるべしと云こ
一書に云、此句ハ桜の雪など云ふにまてまぬとよめる貫之の和哥
に較して虚実の差分を離れたりとも、いかなる見立の句と
世の笑みに小鋭理て判りしうな
何しまうつなし 門の書肴

一書に云、薄調子に行下の三選と合て離句しこれなや 嵐降
限りなく衣かしみ又更なり
まつさに望むハ六かれかゝまらぬ
川さくて新緑に降もちるたゞ中のさ
一書に云、鎌倉に龍つける降女の面影なくいそむその態を
姫くめる嬌態のみなるに絶られさハして見物の人の魅
膝をつけて奇麗なる事れ
豪訴 杖の任お任かへこ
産 路乃 息子女房 呼なり
一書に云、味曽云ひと備に云豈一の息子に始なりしたる時
「家 居たくむのかのなし川ひとまでに
きつよの秋と住かそりなるの付あり
いさゝ立 磨 川 すゝめる 何しし 外
みのまさゝさ乃氣 ちかの 施

一書に云草拓奮眼疾とつくる風情なり蓋朝嵐楽しく
両章きゝよ斧鑿の痕を見す

削ゆゝしき岩刀坂の夕雨風

一書に云京遠谷と京谷の百姓坂なり又廣岸の
遠の方とあり いつまゝ考へし

俳諧言葉人 綿 取の 雨

うき 旅 を 賜し つれ立 海り 雪

一書に云人商人のまゝ 世 音の風情ふるる
つきう

柳の 情へ門 を たて 作り

百姓よ 物 世 百も 老閑きよ

一書に云五柳ふう 御へ 至り 越と 含めるや

撞 暮 よ れる 桑の 松 秀 ふ

日ハ 暮 ら れし 静 寺 岡

一書に云已り名の第集し 深 ると 比 無 し いつる 赤
ら む 楚 辞 よ 物 を 高 き 越と 含 める や 暮 よ 残 る
の 強 より 強 と り て 山 ま あ を か け 金 を ま し て ま
ら の 玩 人 色 き 自 然 と も 出 せ ふ 陪 物 深 よ お う く
して

安味堂云 安 俳 師 の 雑 後 集 よ

三 新 の ら へ ま ぶ く ま の ま く り ふ ハ

撞 り 杉 秀 の 云 俳 し ま も

の 云 ま も や

三草紙よ曰伊賀の連元蕉の生国よ書の 生 きふ
御 念 と 類 よ ゆ ま よ り て 走 う れ 御 る つ き と 撞 ひ
後 白 も 傳 よ 二 百 計 書 く る ま く 冠 板 も せ も や と 有
し よ 元 年 大 坂 と て 没 故 あ り て 元 蕉 元 年 生 よ
さ り 全 新 ハ 天 流 の 前 撞 り 瓜 畠 集 と 云 和 る と

増補せるといふ謬に眠の句もちらへり猶さらに今西氏
撰ハいつうし蕉の滅後の句たりとも多く出せりこれも
不審之といふ愚考ありに云此集何人の撰したるよし
をもしれず書肆今新蕉滅後盛にて俳諧し
たる集之よって七部の列にもつらぬ誤りに續猿蓑の
類号ちらしハ此句と枯尾花にふたれなれ貴ハとの
屋の継るすれたき由ありてあしすとのしたれ附録俳
諧補の基之はおきさるを世に深川しして深川集
を入るゝ七部とよまるゝ人もありされて実のる代
乱しそけたる人の二つ見る比也深川集の編纂
しも祖るのそありしにも一つの病ありて先哲の俗

附曰

家路かるも　征鞍うち　来る　嵐蘭
山伏を切かけける　関の前　翁

そく　七

讃　かくねハなしぬ　世の中　酒堂

此山伏の一句を蕉生涯梅とあひしといふさゝ阿党の
関の撰格にて能様意の文句に聞つても二人山伏の我
切かけてゆくくく只おするよして科人とみえて猶
徑されても敕伐の意味あしくまありひよつて酒梅
勝と嘆じのおほせしとかや

大切な月の二日ある　暮の鐘
雪かきわかし中の泥　うち

一書に云門流に毎月の法会あるゆえと能いひて
とぞ

一書に云二歌の合下日くとぞ
かゞ身て　帝の中と　押合よ
此あるり法事ハ　花のけもなくて
愚考云右尊は此あるりともりたる帝とも文

[illegible]

[illegible]

三綱の里より三神五帝農家の者日月[illegible]

[illegible]

今育賦

賦ハ布ノ給與也分界也責取也吾惡ヒトヨリ出テ陳鋪ノ事ヲノベテ事情ヲ形容シテ事述ル所ノ物象ヲ譬ヘ賦トノタマフ

例ヘバ如支度ノ朱子曰直指其名叙事之書

單言耳ノ義也

衣裳ヨリ湖海ノ物ヲ含ム

一書ヨリ云 林氏請ヲ生徒勇ル倉衣裳湖上秋

志ス〳〵

そこ〳〵

心〳〵ノ

僧ヨシテ僧ヨリ例ヘバ物ヲ撮ノモト強ヒ意ヲ

警僧ノ頂ノウヘヨリ一撮ノモト強ヒ意ヲ

晉書白蓮社記曰左僧左俗而在似僧者

其吏ノ法ヲモハカリ川ノ[illegible]小杉ト

ひゝもるゝめしほかゝすすこうし

且味ヲクヽシテ人ヨ飽ルヲ

管子曰ヨ人吏多詐偽無情實偷取

一切謂之烏集ニ文烏集之ヲ初雖相驩

後必相咄

今育の賦

支考

禮考莊子ヨ曰君子の交淡如水小人之交甘如醴君子淡以

親小人甘以絶彼無故以合者則無故以離

やうてもうゝよ之ゆうけ

拾遺のよもやまかたらむ

異考杜律に曰明年此會知誰健

罪盃の数を呑せむ

異考李白の金谷園の杯を二盃の数三斗とそ

王羲之の蘭亭の会罰酒者十六人各詩成ず。楚恵王

侯に辞して作詩延吟給罰盃

其の数やまかれる吟

一書に云水を含める酒を八盃白むひろむ

又紹の酒釈に池のすそを酒あく附なす

こゝに云異考水をひやせる酒のまハあくこと

貴酒しこ嵩れての酒する時あく嵩も嵩先す

てんを志れめ

書て立まとしる無澤

おれる事等に橋の畫

そく六

拾遺の影に月さ

一説に澤そのうちに澤の山や志の里に橋をそ

嵩ものう新に月れるこう

一書に云考の年日八必日和こく流るいこれハ無澤と

考て立まする理こ酒八手人と橋をしこ月をうを例

の義の人を驚せるこ橋をめ　おこうを　こ男

てあれをいやをきものとるかりそあれうりハ

何の橋をとこのをしたく寄ちをるをそと

考ようくをあてをまこ嵩は考て日和の立まをも

志考考の年の日必日和をこハ無澤の立まる及ま

考考に月嵩に月嵩八日和八つより嵩に月八澤る

とこをこよて立まを附こるものこ嵩に日和を立まをる

もの考法の無奈をこ月四こ橋の畫こうけ

[illegible]
未[illegible]統抜の句附をハ賞之の句を函て先一照像の
工夫とゝ日まて宮の[illegible]日まて宮沿橋の雪角
と宮の拾佛ハ志乃佛[illegible]ハ[illegible]通条の木像真の
拾佛なるを不[illegible]いまを[illegible]を知る木像なるゆゑ
平生明[illegible]の拾佛の新[illegible]ハ作[illegible]るものゝ実有
なるて照像の手[illegible]なる白の新[illegible]中の白の人
拾の[illegible]ハ[illegible]ゆゑ[illegible]の句の海りとハ中なり
天文志曰書高飛而定天気

[illegible]月の句

一書に云古今に見つゝて居むさゝら花
月のおもてハ[illegible]

彩[illegible]仙女[illegible]白[illegible]も[illegible]神[illegible]

愚考杜子美の詩に曰烏人性僻耽佳句一語不驚人死
不休老去詩篇渾漫興春来花鳥莫深愁彩[illegible]仙女
[illegible]白[illegible]ハ[illegible]の[illegible]春来れハ花鳥多唱と人
春来花ハ則色彩揚[illegible]意味深重[illegible]
成人雖[illegible]曰詩の[illegible]のみ[illegible]みて能詩の意とする
所[illegible]
陳[illegible]曰揚ハ[illegible]彩の花なれハ佳句を[illegible]一句[illegible]
人と[illegible]さむ[illegible]美[illegible]能詩の[illegible]
又雖[illegible]曰詩の[illegible]を[illegible]の作[illegible]て杜子美の糟粕
[illegible]ハ[illegible]
陳[illegible]曰詩の[illegible]の作[illegible]遠[illegible]の別名人の[illegible]作[illegible]
七言ハ八字を[illegible]十七字の[illegible]字の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

酒部 [illegible] 琴の音をよ窓の花

異考史記ニ曰卓王孫至日中謁相如長卿謝病不能往臨邛令不敢嘗食自往迎相如相如不得已彊往一坐盡傾酒酣臨邛令前奏琴曰竊聞長卿好之願以自娛相如辭謝爲鼓一再行是時卓王孫有女文君新寡好音故相如繰與令相重而以琴心挑之

人の音もかく窺ハ [illegible] 梅

異考窺ハ[illegible]と呼すて人の音もかくのごとくかくふるいやゝ[illegible]ハ窺ちゞと発る物ゝの法[illegible]

菖蒲の花あとゝ[illegible]

異考菖蒲の花ハ[illegible]

下絵の位置より枝上の一ホすて形九く大小あり む製し方のおこそう姫事云も[illegible]位置の云位よりハ考下絵なる

咲かゝる花や 仮名 十 石

異考白とりて白ますするものゝ岸俵の内ゝ人扶持[illegible]柳ハ人扶持の位ハ小庭ゝ有さ[illegible]柳ハ士以上の庭ゝ有て五人扶持乃五とのゝさしゝて五十石ゝハ結光ゝむものゝ[illegible]ハ庭俵の[illegible]

ハ京橋京まゝ[illegible]京[illegible]

公石云いまゝ乃京[illegible]の邦のハ[illegible]ハ九[illegible]白ひ[illegible]の奇の俵[illegible]

[illegible]

異考宋詩の内姚宋位[illegible]梅花[illegible]月大清生

里坊に雉きくや梅の花

愚考恵能和尚行ニ黄梅ニ師ニ五祖弘忍大師ニ為ニ行者ニ在ニ雉坊
杵臼之間ニ於ニ是大悟受ニ衣法ニ居ニ嶺南ニ為ニ六祖ニ唐憲宗皇帝勅
謚ニ大鑑禅師ニ

鶯に長刀かくる菜芸の水

一書に曰鶯のも踏ちらして細脛を大長刀にさして
かけかやしつる哥の句之とも云く
愚考長頭丸の附に
大長刀にある風そふく　と云句に
鶯乃細脛狂ふらむ
長刀の事ハ武用弁略に白薙刀をも元来太刀なり
それにおしくそとつけて用ゆる故に長刀と書之
されハ長刀に限りて一振と云旧遠考録に曰光仁帝
天城の兵器に擬て作らしむ平清盛公長刀の利を

幸むして一門皆是を用ゆられよりして金條の兵器
となる

鶯や柳のうしろ藪の前

愚考鶯ハ竹に生れ柳ハ正月花鳥の事抔に
して何れも鶯の縁にのりきさる事抔に柳と竹
をあされしりし覚ゆ

芳野西行の歌

鮎のかれんすさまし瀬の音

愚考ニゴカウの歌と唱つあり五雜俎に曰凡魚之
遊皆逆レ水而上雖ニ至細之鱗ニ遇ニ大水ニ亦搶而上鳥ハ風
に逆ふて飛行す

山吹や頬かふりしける簑一重

一書に云七重八重花ハさけとも山吹のみのひとつ
だになきぞかなしきとよみし哥の意をよめるにやあらむ

小股綿よ光をやとる玉椿
思考小股綿ハ素ワタなむとの義なるべき十徳よ
仰ぐる照衣之光りとハ則光明なり仏陀の光明ハ十二
光明之切拯元不捨の意之久安百首よ玉葉光成みなく
君ゐ代よ百かへり咲うゆむけの花
振かうしゆりや廣世の麻の角
思考淮南子日陽之至是以春則群獸除角
えだりや 表 源きく衣のうら表
思考詩よ曰東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公召之
又未来よさらぬ海よ おすの衣をいなきぬ 君
よつかふる所をハやをめ仏ハ 諸所の義なへ
人も見め 書や 続の 裏れ 梅
一書よ云伊勢物語「月やあらぬ春やむかしの」
たるぬ赤ひとつハ有るの分すてくきぬ穀の

そく十

梅の清香清史よ白ひて 続の見梅 一書ハ
きるれさるこそ安ゐれ梅よ家分をよくるるとと
ト去ゐれハ略ル
一書よ云清の宿の梅ハ白と見へうされとも赤分
乃徳と見るへくもなきハ早竟続ハうる梅の花
なり清付るハあれ都く世の人の続乃面ハ見れ
ともうるある梅ハ見るへくもなきぬく世よ書れぬ
その白成へし
一書よ云伊山よハみ雪降ゆ 郭波人うゆ風ゆる
香業竹ゆふ山雅波を続のうるよ引見て続め
うくと富しくくも見へぬこひ見るとと云
香業筆よハ梅の異名之
一書よ云をくの人よ書れぬ分ハ続のうし ろよ
清分 梅 同 続の面なくハなく

しりよくもしられて騒しかるべくは惜かり
むと安き身のおもひを比しての吟之中略
鏡の裏の梅様の事は源信明家集にもとしの
かゞみと讀みそのかへしにも伊勢が家集
に鏡の裏に鶴の形を鋳つけて侍りけれは哥によみても
ともなかいのしむかしにも田鶴のうへそ見るべき
なる今俊明が云く此哥を本拠とせられしには鏡の縁と
もいはまほしけれとも叶ふべしとは云かたし鏡裏の絵を見て思ひ
やりしさまなり似たり又梅花鏡とて古器には裏に梅花
の形にあるものまた俊明がみる古鏡にもさる物有と云て
一書に云墨梅の詩に瘦損昭陽鏡裏春と云こと
一書に曰さりとくの説ありとても其皆すで穏当なりし
いふ所は易に艮其背不獲其身行其庭不見其人無咎と
いへるがめく近思録存養類程子曰人の其止るに留む

止るは動かざる所以の者は欲に動けばなり中略 此鏡の背の梅
も則人の背なれば背は立所もとまる所なれば但して
此しいさゝかも思慮なくしてともに随ひて行なるは其
背に艮るべしといへるもの此あまりつけて色身なきなり
を知るべしとぞ 蓋此古語より求出せる一章にはあらし
鏡の裏よりうつるものは誰も見るべし見れどもそれと身を
離るにいは是なく所證なりしと云て
余味童云居京楚辞韓龍鐘に曰世人不知讀鏡裏梅此喩は盤桂
禅師いせの國鏡の事は筆にて書記しおきしを僞りひとつのことく
玉葉集に
月も見ぬよしまきさぬのまとてもすむとも月の影をこそ之
明る夜のわのよろこびし嫁が君
一書に曰陰扁に人家の梅に灯をかけて夜もすがらのふ
去をつくし去来が湖東問答にも此事あり梅をかるに

五元集拾遺より真の部より入ハ非人今案ずるに寒菊の部より
出すべしと云々
湖東問答より云其角ハ明暦の頃の人なるべし姫ハ君
ハ勿論嵐の事なり一説より大年の板大黒板のことなり
灯ハ是を踏ハ君と踏ハ君より是を踏ハ君を踏け
ぬる灯明なり踏ハ大年の夜元朝うけて嵐の
事と踏ハ君とハ踏ハ踏ハ君を
是ハ嵐の事なり嵐乃事なり
是ハ其角句解の説ハ一向誤なり寸歩ハ踏ハ
君を是ハ嵐の事なり嵐の事なりハ姫ハ君を見まるハ面と
清涼大脱い称つむい称めるハ諸事生あるものを例をうて
歳旦より用ひ来るハ是新年の祝言嵐とハ
なるべしハ踏ハ君と例と歳旦の句とをもて押
しるハ其角ハ清鬱人山陽の句なるゆゑ大黒

そく　十二

板の歌を是ハ嵐ハ清涼をハ知ぬ句年板
ハ其角を没せり五元集より
も歳旦の部より入るハ大年の句と何を是
の部より入るもや又嵐と踏ハ君とハ
なるべしハ部を違ハ
寒菊　青かく
諸の世阿弥ハ
是ハ世阿弥を二代目ハ
世阿弥を夫ハ二代目ハ
ハ世阿弥を記世を夫ハ大和国猿楽ハ
ハ世阿弥ハ東山殿の御時礼
観世座と云ハ
神ハ若狭乃白比丘尼
公石云本朝列仙傳ハ白若狭の国ハ白比丘尼と云ふ
ものあり其父山中ハ入て仙人ハ仙人ハ人魚と

いつくのとうの（て云是と食すの時ハ老せすして
命長しと云よ海ちりもは彼世子是と合しそ
ほ百余年と云々（同国空印寺ニ八百比丘尼の木像有と云々）

曉雨　ヒヤウ之　五雜組曰雹似是霰之大者但雨霰寒
而雨雹不寒霰難晴而雹易晴如驟雨余在齊魯四五月
之間屢見之不必冬也文書所載雹大有如桃李者如鷄子
者如谷者如手者されハヒヤウ之字の字ありの字
酉陽雜俎曰木苗花夏有雹又慶安二年五月十三日武州
川越より隆〻雹を大二寸小四寸ありて人馬多死

蕙の花　郭　元

愚考　僧聖徒ら詩ハ蕙子辭ハ菓始到家杜鵑歸
處在天涯是等の意ハ似ら
涯ちうも似ら
ちけう　杜宇

一書に云言奇涯ハ牛なくよ時ハ牛なくよ時ハ
歸言のうゝ
愚考を食の奇と
時ハ涯の系
ちゝきに涯の
ちるや
愚考　夜蛍　蛍せこう
ふるよひかるゝ
ちゝて　西京雜記曰目眶得酒食一灯花得錢戝乾鵲噪而
行人至蜘蛛集而百事喜

石うゝや　蟲　つ　ちゝ　ちすゝ
愚考　雪中の鶯ハ難と書て むかし夷なり
去海の入ハ
蔵人の鶯ハ
公石云　古今の歌ハ高人のうき帛を むのう

俤しつらぬしといふやんまに合めつむとあり
粘にかる 蚫も 栲の 異名
思ふ夜月の老ほにみる蚫ハ粘の用なり
神楽歌の残にも蚫とる栲の沖も歸られ
伊勢のうらの附なり
おりあや 蚕飼ふ 桑の畑
一書に云 五月五日頃なれハよのつねにハあらへある
まあされとも蚕するゆへに桑畑にあそ桑の
葉とるを云なるへし是何ゆへなれハ蚕のみと思
ひ飼ふ人ゆへなりといふこころを蚕飼ふへしとそ
作たり蚕の飼つゝ思ふハ悪しと云く
忌者ハ蚕のゆへにといひ飼ふとみるハへのみる見
やうなり是ハ別蚕の飼く蚕の繊経のよかしぬと
飼ふといふなり五月五日の比ハ蚕も末になりて

おかやうをかおかあぬりのさとしおやし
十論為辨擲に曰 鼓翁の発句にまた附句をも
古詩古哥を蔵へるハ甚しくあまりなれと
其詩と知りことさと志す時ハ定のふかくいふハ一句
もなし 當時に猶学者作者達ハ世界の人乃
知ぬ事をして集を人にかあしむるとハい
かなることの賛そやあなた附に鼓翁のあの編よ
以下白氏文集と見て老鶯と病蛍として之ふ
この詞のおかしくとられもらと云く
うくひすや汁の子藪に老を鳴
五月雨や蛍かくして 桑の畑
かくいふ二句とつらり侍りしら鶯ハ筍藪にと云ひ
て蛍の余情をいひしく傍り侍りも蛍ハ麁芒と
志らぬ人ハ心のなしひとえてそ志るまし まれなれ

蓮の一字をいまして表する例をあむしてその句は
まるよ中拾遺集に入るよう例の海松集に入るよう今は
其集と悔むるもハそれ形ばかりの廉忽おかれハとそ侮る
形つ毛蓮と云ハ故実なる古語なるを及つまり古
今と載入の程とすつ
蓮葉雲云第屠集今文何昌むるの作る藪よりきと
唱しく
きつとなるく唱て古ちり蟬の声
思考陸雲り蟬の賦よ蟬有五德頭上有緩文也含
気飲露清也柔稷不亨廉也不巢居俊也應候鳴
信也きつとなて八信之速よ云八俊ちり也土用と
候て唱古則ちて止八信也古ち
文庫も形ひ乃中れひ川ト
思考後漢書ヨ楚王細腰を好ぬるて宮中の女腰死するも

のもありとうや見まを寵と待むの乃ちり見あの
殺人食白飢万葉集曰吾妹腰細之須軽涙之其姿之端正
古ち腰乃麦ちく麦ちく乃て、事一鏡
蓮葉雲云山蔭中納言持ちて蓮の葉とうて曲宴よ
ケ鏡ちと脱て蓮葉とうけてめ人ちれハ浴室
池ちきの人ちの今ちの生風とりてちの上方ちて
山蔭の吸酒とちつと出ちを川柳の今し
沢潟や芋つけかゆる面のあく
思考新田義貞朝臣の軍勢ヨ曰義人道よ迷ちて方
角と失つ附沼潟の芋付向ち生る方へ行ちて必人家
をかくむくちれハ沼潟と侵よ毒物とちるる
ちまちは一面ちよ生つて又くあくちる踏
ちるるちれハ面の沼ちくハ作ちくハ作ちくむ

晉淵明とうとやむ　　章

窓形　至　無の　一書　むとあり　て　屏風の画賛

一書に云晉淵明と義熙の時郡守遣督郵至
なり傳に曰淵明為彭澤懸令時郡守遣督郵至
吏白當束帶見之潛歎曰吾安不能為五斗米折腰向
鄉里小児耶即日解印綬歸去其時歸去来の辭
有序行を勧るに八十余日にて官を去て里に帰る
秋とあるにしたがへば安帝の世なるべし
ちみ山のみちすでに荒
愚考に解云淵明の傳のみちすでに荒
とあるは彼淵明の五六月中北窓下卧遇
涼風暫至自謂羲皇上人とあるにてうかがふ
なり山谷の卧陶軒の詩に陶公自須卧宇宙一北窓
又笑荒顏藜二曰采二菊東籬下悠然見二南山其形影

神之篇皆寓意高遠蓋第一之達磨也又鶴陽公曰兩晉無
文章幸獨歪此篇耳詩に二姓に仕む吏と称て宋文帝之
時家に卒る年六十三靖節先生と謚る謚法に曰采
德安衆を靖と云或曰恭己解言或曰寛樂命終各靖と
云好学自克と節と云是等の意味とうけ合へ
名月二句の評あらう
今のこのむ月の一句に保あるべしむ月のかつらのみや
そたちにしたがひて花とあるべし
西秦新書今秋の果て月の桂のみやをかるひとり
を花とたちにしたがひて月に花あるとて
毎月花とたちにたちにたちあるとて実をなるべ
しとの説の言葉を書るにたりぬ光りを花とたちにたちあ
ぬ桂の白くしてこれ四月を花とうかがひるるなり
月又外

是秀霧沿ふまで因藤下野守[redacted]五万石を領せされい
者ゆの詞平人の句にてあしき
ふるれちつとも床めや常の月
是秀奇にまだ手来てトゐる八子みてふるのかけ君
附そ意八明れたる山るハ夜の樹に岸そ揚角風
会まして此句ふそへり明月に清光を足気と競ひ
てちつとも康きまは明らしむからん気すへし
家にハ老世まつすりあり古叉
松陰に秘して侍へ侍りしを
みわひまして
蜈　捨そやみまのかなやりよの月
是秀ニ壱世とゆて蜈捨搖垣関寺之猿楽家の侍
ちてそ足をと侍くぬ実八関りの作るとらつき
余そ来り候

川上とこの川かみや月の友
云石云孟子に曰従流下而忘反謂之流従流上而忘反謂之
連といふ流連荒亡之楽行
舩舩の雲走りくや星の影
是秀七夕のよろまる糸のくさしぬく牽牛
織女乃銀河の舩よそわりふそ総色り国據活法
に曰崇安縣乃武夷山に石舩岸有て舩舩のこゝし
とゝのやきれハ舩舩の雲と作らしもすく客くの里
七夕をいかなる神り続くべき
是秀長明四季物語に曰七月にあられい大宮か
ありし阿る御遊び連おのゝさ所し許よみ讃
ぬ限りくかゝりてもよくみえくるもありてまみつと
私の書くと経くひみちもしさ一句を記つすくし
一ひらそのみ叶へむとてふくふせゐき神ならうと

くちもとのかをるべき美濃紙にしるしつけるかせいさ神方
の祈ふしをしをもむ
世の花祈ひめ馬骨乃すゝ汁
馬考めゝ花ハ女子の愛称なり婦人ハ面て
花源くかさきしきものの白化粧ゝ彼要くのめゝ花の
婦人ハ馬骨めゝ老くるハ馬骨めゝ
一時をゝ移るしひしも此姿なり
めゝ花物語の枝よたくかれる
公石云是別めゝ対てのの白ちり越中物語の
往て神変ゝ男と結ゝ数珠玉をりて女子を
おくしをゝ
さよ衣のたもとゆゝつゝ稲花
一書云李章ゝ津万稀花風化花くゝ住男婦ゝ彼ゝ

住ゝ義と義ひてのゝ美ゝくのたもとゆゝくつ
ゝ稲花と人ゝ無しゝるりのたもゝ彼ハ武蔵の稲姫
と義ひて野蚕くゝ婦ハ稲かれてあつまくゝなもゝ
りゝと如ゝて化ゝるりの花
再考小文庫ゝ

影形や丁の寄る時狂歌
抱儀云古今集ゝ秋の歌乃露とハ法ゝ垂ゝ
うゝ丁の洞や 貯四と清ゝむけゝくのゝ成くゝ
ゝゝ

幕ゝ 志ゝ人や 鬘帽子
ゝ時重云くの義集の絵書ゝ俊成卿新歌とゝて
世のたゝのゝ生ゝと記しゝ
公卿の百ゝ生ゝ人ゝて侍ゝ鬘帽ゝて
秋の夜や 美ゝ新ゝきりゝ

一書に云ふ蓮葉はかりの命の言葉
月うけふける庵茅屋の窓にもれて
爰にさしこみ[illegible]あるかの斛すると言ふ事あるものを
[illegible]の名あり[illegible]
一書に曰ひ初の尺乃奇なる初めの言葉つくり
[illegible]れの有[illegible]
何[illegible]
一書に耿潭と詩に古道ヲ人ノ秋風動秋桑の言
も有つゝむ
松の葉や細さもいかに秋の雨
[illegible]
在天四無人夢聲在樹間曰嘯峰悠々此秋声也[illegible]
松風琴をたゝるたしの俳句

稲 書や 園のくれ初五位の雪
公石云五位鷺の羽ハ雪ちらく光あるおもてはは
園の方に飛ぶて[illegible]稲書とかけ合やうるものく
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

農業
記[illegible]
一書に云記[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

又は八まく花でまつてよんは正流に
是秀端書よ伊勢の手従に素りし変おきまつて八
別得也とら人こゝろのあらくて叶いぬ句と芭蕉句
選なりしまいは女いしまると肴さておやるハ此の家よ
なすと句意ハ慈鎮和尚のいさらいハ得也ともとゝる人お
こつれて便りられしき花柑子ハいろことぞ弁
返していもよりつ柑子の花くと返りつ御さるぞという事
いせ人の来らりたる是観よるなと花でえて物まとし
いへる意此句なりきはさへし書きよおろくとこゝろあて
みるへきるくすべて端書有句ハ端書よ添まと添ハ一句
立ぬ事ハ詩哥連俳ともにおなじ端書のなくても
すゆる句よ端書するハ所謂白ゟ指蛇足よ等し
かしむもの也

主つるや西瓜上戸の花乃さま

是秀擲（ツリ）ぐらいハ此よまなたくといふ人の譏あり
して大上戸成よし呑仲間まて大坂よ施薬
坊慈源なりむといふ里なり里の蒔絵よ蛇蜂
蟹なむしくと画りし蛇ハ呑ならぬ意蜂ハさすとし
いふ意蟹ハ横を横むといふ意西なれ叔西瓜上戸
とらのハ古きよ此れあるをたくといふ上戸成べき
まや西瓜ハ少たきて熟をとるもの多ばかく
いふなし

元列し子のやなとし白菓乃玉杜丹

一書よ云菊ハ蕊菓とい玉ハ子（コ）之杜丹として
子といふハ蕊菓の実かへ見れハ其れ愚列し子
なしきやそのくさしよつてなりも白菓の子ともそ
いふやくと皆めとなまり
むしろいきやかくる正流の菊花象

此句題に画屏を見て句の魂とせし
は此画屏はうつし給ふの擬作なるべし俊成卿の息
女の歌に是ひ然画に侍ぬるに安宅せり折膳
のうへは東鑑に曰建久四年五月十六日の処に富士野
御狩之時将軍家督之若公始令射鹿給中略狩野介進
餅子餅将軍家并若公敷御行騰於上令座給云々将
くハしくハ東鑑に巻狩の画屏とうつし給ふ御作とを
閲して知べし

禮内則曰謂之福蓋諸侯邪經於足以見天子者子事父母一然矣

鹿渡や 背負ふて 帰る 秋の暮

又芳曰暮秋の淋しさをせおふて帰る体ならし
秋の気色を見つくしたる

柿の葉に 焼味噌 盛む 暮 之若

公右云家にあるじハ汁なる鍋をかまへて様に
しあるじハ柿の葉に汁斗の侍すや

稲つまや 顔のところが 薄 乃 穂

芭蕉行状記に曰骨相観の心を我に書と曾
一書に云髑髏の吟につけてもなつかしくさのみは
いまし薄生たり此句のみも侍るやとなく
一書に云有為めぐくの身ハ元来ふまへたる句之此句ハ
世に一休髑髏とふ書ありて髑髏ありの親婦
酒宴し抜へさるゆへしるし男女現遇の家かれども
しえ侍るあらかしさて一休の道斉ひとつくありして
句意ハ明らかなりとなん
恵光家書に此の髑髏を題として一つかに夏現とい
かくさるものこの生前をあさなものなるは撰集
抄に西行の書けるとかうけての文ならり句のまた
別撰集抄の第五ヶ故事をとりての骨を観へ深の代
に仕へし事そのよしつてとの和平野遠ひて肯

乃ちの一ツの菁蔟有けるにいとあやしき女の聲を得
てみるに其まゝ一首を云ひて其義を明しけるに暁に
及びて見れハ薄くさる一むらの薄の髑髏有中にあり
けるに尋ねし問けるに是ハ極かいくる女のとらく
生涯聲を好みける死後まで魂心の残りて斯く
有事之と聞りけるに去く　稲妻やと詠しかけるに
電光朝露の俤なる仏なりあめの夜しまひ女と見え
しハ姿なるか秋ものあはれや　宮哉　是弱紫に衆
し　鼓の所に薄の穂先と歎し宣ふあなめし
の奇せらるゝハ曲もなき妄説之此閑居の連哥
なりし八秋風やくとしてつれむなりしもと哥の殺
之殺の見合なりしは聲曲の事をすてゝ自作
せしもとるまなり　小町業平の問答の歌解めかす
ニ底皆迷へるは小町の髑髏に薄乃生つゞめける

とあなめくといふ思しめり給ふを業平の是をとな
とあめむかの為に小野といへしとく薄生乃ふハ大
野なるへしと云続めさる連哥のこゝろ集乃是
万葉によそさの大野の薄とよみて薄ハ大野に
しそ生れ小野にところに薄かとにつる題なり
ゆあく此俤なりと迷へつのり彼極所の
待りに変ずへし将以ふ事有歌の所見し随て
よむへしそらに書あり言語同断ても是は
なまも思ひぬ嵐芽乃従に迷ひなりれや
とも切て見る切ものなれハあはれよくしてすりを
なく後を請くして思へしなるの字なりまでも
あるハ歌の所見薄乃穂先と何ゆゑ哉ひなと
入るぶ身白しきさる髑髏と挽をしてと云ふ端
書ハ荘子乃熱を含めり荘子之楚見空髑髏

髣髴然有形 甲畧 援髑髏枕而卧夜半髑髏見夢
曰子之談者似辯士諸子所言皆生人之累
也死則無此矣子欲聞死之說乎
[illegible]
一書ニ云和附子
つゝ[illegible]年八世の人[illegible]年をとゝせて[illegible]をもゝせ
[illegible]

[illegible]る [illegible]つる一附子
一書ニ云楚玉園裏蔬中子[illegible]の作[illegible]
元孫辛酉年九月素堂菊園を拾
[illegible]元孫辛酉[illegible]

[illegible]年[illegible]必[illegible]辛未ハ元孫[illegible]年[illegible]ハ月
国[illegible]元孫[illegible]年ハ九[illegible]年七月[illegible]年[illegible]月[illegible]
[illegible]菓花[illegible]

蔔の香や [illegible]切[illegible]密乃度
一書ニ云花を初花を黄して初花乃殺ひハすく
[illegible]菓ハ一とせもの[illegible]
[illegible]ひ[illegible]まして[illegible]天麿の帝代の孫九月ハ
延喜辛乃四月[illegible]南[illegible]九月の妻
[illegible]十月[illegible]延喜の帝代
[illegible]菓乃妻[illegible]
[illegible]ハ秋のうら[illegible]
[illegible]菓を秋乃赤[illegible]
冬の[illegible]
[illegible]
[illegible]孤雲二十年長孫道生一
熊皮澤泥報十年蓋貴而徐俊 若陶渕明

十年著二冠言其實也是古人言を尚ふ習なり
法ならぬ琴を作りしぬ 素の友
玉考場古より宋末の頃士人陶淵明なり宋末
八蕃陽縣にて協栖の紀るより 各法乃尊ハ淵明の
なるべきなるより人見件同志人ハ元源中の書傳
なりて古石を作し聖事借の象形なり
一家も古なるぬ 蜀乃水井
一書ニ云ふ人接やうて命を知る人ハ云ふ
くの古かなるなりて 項なるなり
嫁尊云場古の諸南とあるを非なり 長男乃
書拾なり史記列傳ニ 姜し 范蠡ニ次子 罷を
負ふてなるなる金をなりて 金を横みて 横なるなり
玄男 金を横みて 横なるなり
この 言を云ふ人の述たるなりよて一家も

古今を人例乃長男の言ふ中ふを
作ふなり
本かしや 琴手 吹ふ牛の夢
ふうしや 蓋ふ紀ち今牛の角
かなてふのよいふ 牛乃直角を作
こも 吹角を 乃二角なり
夷 攜 那 ふりは 稽 者なり
一書ニ云夷 攜 ふ 貨 廷乃 業 事 を 拾
夷 酒 蓋の 而 手 那 ふ
時の白し足 ふりさ かみの 拾 者 ふ
稽 ふ ふ 手 ふ て ふ 通 白 か ふ 福 人 乃 今
手 拾 八 川 も つ ふ 那 夷 乃 那 夷 の
ふ ふ 一 奥 ふ ふ ふ ふ 稽 ふ ふ
夷 攜 驚 も 嘶 ふ 宋 ふ ふ

[illegible]の鶯の鳴かぬ化物[illegible]
[illegible]示雅二曰鶯小鶯也野鳥見家曰鶯[illegible]
[illegible]馬[illegible]人[illegible]
[illegible]指遠[illegible]百[illegible]葉[illegible]

杜[illegible]

[illegible]

[illegible]詩[illegible]杜[illegible]
[illegible]方言[illegible]
[illegible]杜[illegible]
[illegible]国語[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]河[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]杜[illegible]
[illegible]
[illegible]杜[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

行事[illegible]　入[illegible]

愚考鶴林玉露ニ曰林逋梅妻鶴子清貧孤高一世之人也蒲梨ニ鄙褻物鄙同一
褻貴所ニ一視矣此句或人難ニ曰古人詩ニ多用ニ酒食之句ニ
[illegible]

陳[illegible]云[illegible]ハ一[illegible]ハ[illegible]
知[illegible]何[illegible]解[illegible]
[illegible]ハ句[illegible]解[illegible]
意[illegible]ハ[illegible]
僧[illegible]

[illegible]

又[illegible]
[illegible]頗[illegible]

[illegible]人[illegible]
抱儀云今世[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]達[illegible]解脫[illegible]阿[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]善覺[illegible]著の[illegible]以て
解脫[illegible]淨脫[illegible]の[illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible][illegible]
[illegible]

墓　系

一書に云ふ李朝文樣に御諸の[illegible]の句に
[illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible]
[illegible][illegible][illegible]

椿人乃ちからもなく稚の花
一書ニ云乃紫ニ云乃かおまてなけるなる飯を茶まて
椿ハ一名ハ椿乃茶ハ椿乃茶ハ馬乗せ椿椿や
もる椿森なるの風雅なる花をたるるの人を
椿ちるなり
説義大全ニ云氏白ハ侍ハ解しかく
詩六ハ親寒ハ椿の花乃ちるなる仏ニ木蓮の
椿ハ出ハ白鮮の色一白ハ解ハ也ハ離世せ
す花も椿人乃風雅ハ仏ハいかなるやまさ
引奇乃ちるなる椿の不自由なる海を
ちるなる都て世乃椿人を見の人ハ長ハ海ハ
ハ椿ハそれハ花ハ木ハて山中不自由勝ル
るハハいひ椿ちおかハあるハ附ハ椿の椿乃
花の椿ハ

ほ〻ハ花ハ乃ハ椿ハ合椿を書ハ学力敏ハ
ハ椿ハ椿ハ椿人のちるを椿ハ
て椿の花乃ハ椿人のちるを椿ハ
ハ椿の風流ハ面白ハ椿ハ椿
管めハふるハ乃州ハ椿美ハ椿ハ五器一具
のめき師遊乃ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ
椿人を椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ
椿人のを先挙て云ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ
上略 椿の花乃ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ
ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ椿ハ

我旨頼逝時去世遺族東土頑嵐ニ〻愛得我
所志の者ゝて方郷より帰るさなくさめ
ゝて年を八嵐もくゝ〻ゝて共志の〻〻
うゝく八夫後条の郷貴頑嵐を嵐り愛態セ
ゝり

編書や浮世をとる移蘇セ
る時云西上人移蘇山ゝ世をよろふすて
くいのまゝ中〻西多無〻むさゝ八稲書
乃ゝ〻ゝる和のり落るゝ〻ゝ〻むりの
ゝを

又春の庵ひ〻けハ秋ゝ
ゝ秀西り上人二見よおゝ〻ゝ移蘇を又芸ゝ
て和奇を保〻西のゝむゝの侍ゝる〻〻
柳よ春る情や柳よ小豆粥

抱俗云天平神覚曰正月十五日作膏粥以祝門戸
又事又類聚曰別里風俗正月望日祭門先以楊柳
挿門陸楊柳枝所指仍以酒脯飲食及豆粥挿著
而祭之又拾芥抄曰正月十五日夜時煮小豆粥為天狗
祭之庭中東上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無
疫気一説云〻〻〻〻八月八日云八月〻〻〻〻
云事根源曰寛平年中より始て煮て
者〻〻て為ゝなの〻〻する附あり
山白のゝゝ者〻〻て〻と侍書ゝ者ゝ〻ゝ彼さゝ〻柳
柳のさゝ〻の為ゝ柳〻〻一度ゝ八ゝゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ
ゝ〻ゝ〻ゝ〻

さてものすり中宮撞木度乃奇々高砂や社業の
人乃手ゝけて右ゝうりあの製すゝ
疑書ゝなるゝもゝゝ

月院社藏板

七部解大鏡　全八冊
續猿蓑注解　完
再考近刻
七部解小鏡

月院社藏

文政六癸未年十二月

京都書林　中立賣堀川東江入　浦井德右衛門
寺町通二条下ル町　野田治兵衛
東都書林　日本橋通二町目　野田七兵衛